

文政三年(1820年) 山本泰助作 銀屋町傘鉾 「流金出世鯉」製作者に関して

高木 忠弘

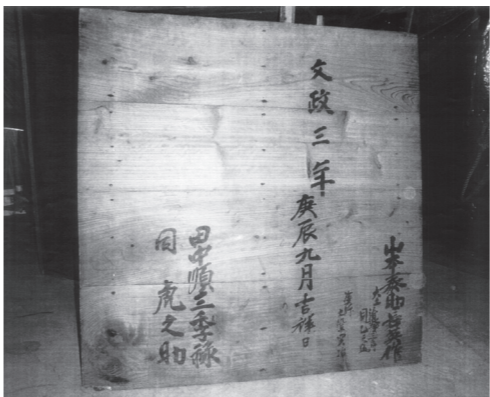
表題に掲げた銀屋町傘鉾は文政三年に山本泰助が製作した事を傘鉾収納箱に墨書されている様に町内では古くより語り伝えられていました。しかし乍ら山本泰助の氏素性に関しては何も判らず今日に至ることとなりましたが、上野彦馬そして彦馬の父俊之丞を考察して行く過程に於いて、銀屋町高田家と八幡町大神家所有の亀山窯との関連に辿り着き、更に木下逸雲との関連で絵師上野家を調べる事がきっかけとなり俊之丞の父若瑞、その父若麟の来歴も知る事となりました。

の細工術を習得し、画法と併せ一家相伝して子孫へ伝えたと考える。この所を銀屋町とよぶ町名の由来にもなっている。金工の職人が多く住んで居た町であつてみれば、師匠河村若芝の名を継承使用する若元は、長崎鋳をこの町内により誕生させたのかも知れない。そして硝酸を用い鉄や銅を腐食させ鍍金を施す応用化学の技は、私見ではあるが、俊之丞の時代になって科学者として大きな華を咲かせた要因になったと考える。

上野家の概略

長崎上野家は上野英智、三郎四郎、その子英道、次郎右衛門、そして英道の二人の子供英伝と良慶に依つて上野家と幸野家に分かれている。其の後、英一の養嗣となつたのが若元(道英)で、河村若芝に師事し、佐賀鍋島綱茂公に絵師として仕えた。その長子若麟(長昭)は山本家の養子となり山本丹次郎と云い、書記(筆者)の才も持ち合わせた絵師である。そして其の子供達は若融、弟の若瑞と続く、共に有能な絵師である。そして上野若瑞の長子は若龍(俊之丞)、その子彦馬へ続く。上野家のポイントとなる人物の1人が若瑞である。縁籍の広がりが始まるのである。系図にも示したように、長英・若瑞(俊之丞の父)が田中倫と婚姻した事により御用時計師幸野家も後継者の面で安泰する事となる。倫の兄の子、田中吉郎八(督融)が幸野家へ養子となり御用時計師幸野吉郎八(徳栄)となる。倫の兄田中順三師興の妻は御

若瑞の父、若麟は長崎画人伝によると「山本若麟 名は長昌、明和2年分限帳に出島乙名方紅毛通詞の条に出島乙名附 筆者小頭 山本丹次郎」とある、又瓊浦画工伝には「若麟、唐館公用支配人、山本丹次郎、若元の長子、名は長昭」とある。そして上野一郎氏より戴いた資料には「唐館鈔局令ノ苗跡ヲ相続し山本丹次郎と称した」とある。若瑞の父若麟は全ての資料が山本姓である。故永見徳太郎氏は長崎の美術史に於いて北宋画人系図にて若元、若麟、若瑞の姓は全て山本とされている。



収納箱蓋内側

が田中倫と婚姻した事により御用時計師幸野家も後継者の面で安泰する事となる。倫の兄の子、田中吉郎八(督融)が幸野家へ養子となり御用時計師幸野吉郎八(徳栄)となる。倫の兄田中順三師興の妻は御師匠である河村若芝が唐僧逸然や木庵より鉄腐象嵌の法を学び若芝系金属加工

唐僧木庵より伝えられた鉄腐象嵌の技法は河村若芝を祖とする若芝鋳を生み、上野若元より若麟、若鳳、若瑞、常足(若竜)まで、一族が全て其の技術を継承し製作を行っていた事を大喜正勝氏は著書『肥前長崎の刀剣』で述べられている。銀屋町在住の金工細工師は金属を加工し各種の製品を創り出し、文政三年には傘鉾、「流金出世鯉」を製作している。そして、その中心には絵師であり金工細工師でもある前述の山本泰助が存在していたと考える。上の写真と同じ傘鉾収納箱正面に墨書きされている水銀箔、流金、大工、塗師等各分野の技術を持った人々を集め製作している。しかもその中でひととき大きく銘記されている「田中順三季祿」とは系図【一】にある様に本籠町田中家の人物であり若瑞の妻、倫の実家でもある。

左記の表は各人の没年を参考までに表記したもので「田中順三季祿」を特定する為のものではない

Table with 3 columns: Name, Birth Year, Death Year. Includes entries for 上野若瑞 (1827-71), 田中順三師興 (1811-2月), 田中順三 (1827-6月26日), 田中順三 (1813-1月7日).

※田中順三(3名)の没年に関しては長崎南公民館「どじょう会」の皆様が平成四年に平山芦江氏を顕彰する為に作成された冊子を参照したものである。

上野若瑞は仕事上、金工細工師の棟梁的な立場に於いては、山本泰助と名乗っていたのか? また、父若麟の様に一時的ではあるにせよ山本姓を名乗る必要があったのかも知れず色々な想いが湧いて来るが、いずれにしても上野若瑞が山本姓を使用する環境は十二分に整っていたと云える。

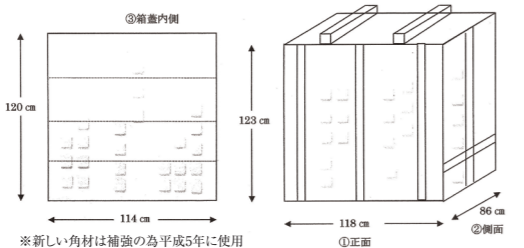
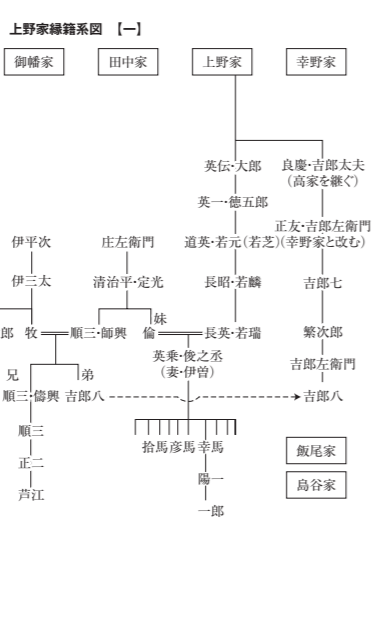
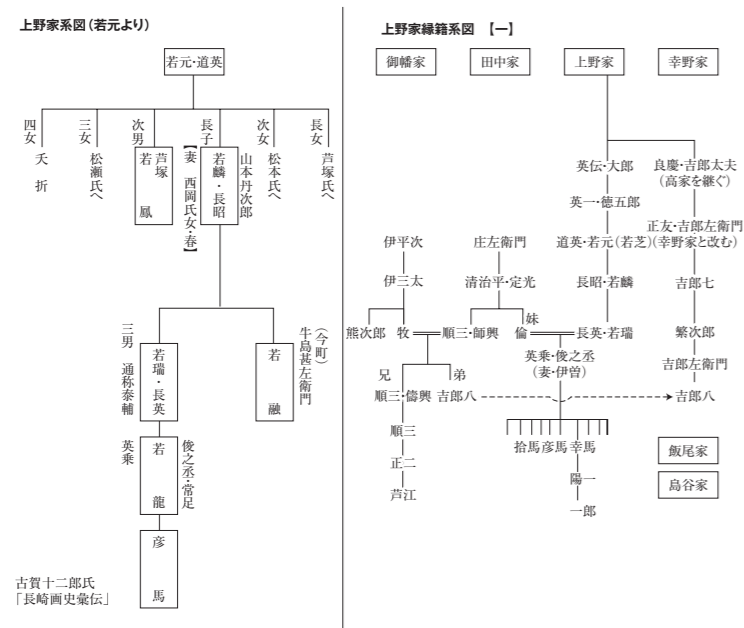
銀屋町傘鉾の収納箱墨書、いわゆる箱書きは我々に其の歴史を雄弁に語りかけている。文政三年「傘鉾流金出世鯉」を作った職能集団(水銀箔(箔師)、流金(金工師)、

塗師、大工方、絵師)は銀屋町及び其の周辺に居住して居たと思われ、且つ彼らを統率プロデュースしていたのが金工細工師棟梁で絵師でもあった上野若瑞こと山本泰助ではなかったか。さらに決定的な事柄は、若瑞の妻、倫の実家である田中家より順三が山本泰助と協力し傘鉾製作に関与していた事は収納箱へ「田中記」と墨書している事である。以上の事から判断して山本泰助長英と上野泰輔長英とは同一人であると考え。今後は専門職の方々に調査・検証を御願ひし、ご教示賜りたいと考えている。(銀屋町自治会)

風信

○二月は逃ゲ月と言う。二月はあつと言う間にすぎ去ってしまう。その二月の雪の降つた寒い朝、三ツ山の純心大学の先生より「今年も雪の下に露の墓が芽を出しました」と、わざわざ御届け戴き、皆で有難く頂戴いたしました。○三月といえば彼岸。「暑さ寒さも彼岸まで」と言う。彼岸という言葉は佛敎語で其の語源は梵語(サンスクリット)の Pariman (param)「向う岸」の意である。我が国では彼岸会と言ひ、春分と秋分の日を中心に佛道供養の日としているが、インドにも中国にも此のような行事はなく我が国独自のものである。聖徳太子の頃より始まっていたと言う。源氏物語にも彼岸会の事は記してある。

○先月末、「ながさきの空 第二十三集」創立三十周年記念を十八銀行の御援助で発行させて頂いた。本の内容は去年毎月発行した「ながさきの空」に、各方面より御寄稿いただいた論集と、本会古文書勉強会の皆様方が一年がかりで完成された御著作、出島オランダ医官ボンベの指導で蘭医松本良順が編述した我が国最初の「養生法」上を掲載している。本誌御希望の方は本会事務所まで(無料・但し送料は一冊八〇円) ○先日京都西本願寺発刊の雑誌「大乘」編集局大栗典子先生・写真家の田村太平洋氏が長崎の特色ある食文化として有名であった「長崎精進シツポク料理」取材のため来訪。長崎の光源寺には二百年にわたつて毎月十六日の御講の日に婦人会の人達によって此の料理がうけつがれているとの事、早速調査に同行。其の料理はトサカノ刺身、ヒカド、ペーシン、トロクスン等めずらしい物ばかりであった。○前号にてお知らせ致しましたが、三月より本会の各講習会・冬休みを終え再開いたしましたので御自由に御参加下さい。毎週月曜午前十時半より長崎学。毎週水曜午後一時半より懇話会。第一・第三火曜。午前十時半より古文書勉強会。第二・第四金曜午後二時より長崎食文化サークル。(会費不要) ○「長崎九條の会」井田先生来訪あり。今年も九條の会主催・本会協賛の「親子で歩く長崎の史跡」に昨年も一〇〇人余の参加があり盛会だったので、今年も五月四日(祝)に開催される由お話あり。其の準備をして下さいとの事であった。○今月御寄贈いただいた長崎物語。簡略にわかり易く実に織田毅氏著「龍馬の長崎物語」。簡略にわかり易く実に良くまとめられていた。(亀山社中ば活かす会刊・千円)



傘鉾収納箱と墨書について ①収納箱 正面 ②箱蓋内側 ③箱蓋背面 ④箱蓋裏面 ⑤箱蓋底面 ⑥箱蓋側面 ⑦箱蓋後面 ⑧箱蓋前面 ⑨箱蓋後面 ⑩箱蓋前面 ⑪箱蓋後面 ⑫箱蓋前面

長崎歴史文化協会 研究室 TEL 八二二一 一五四〇 十八銀行公会堂前出張所 2F



カット 中村 繁勝 なんばんえびす